

雪 兎

く 輪かんじきとスキー く

皆川美恵子

盛夏生まれゆえでしょうか、夏の対極にある冬の寒さは苦手です。もの心がつき始めた幼い頃、東京にも記録的な大雪が降ったことがあります。濡れ縁に積もった雪を手で持ち遊んだのが、ゆきの感触の初体験だったように思います。母は若く、南天の実を探してきて華やきながら雪兎を作ってくれました。この雪の日の記憶は、兎の目の赤さのように今もって鮮やかでなりません。

アレルギー体質で蕁麻疹に悩まされるようになってから、生命が芽ぶく春から初夏の季節も苦手となってしまいました。チンク油で真っ白になって、独りふくれ面をしていたものです。そして冬の日を迎えると、冷え症、低血圧で身体が凍え始めます。厚手の靴下、毛糸のパンツをもぞもぞ身につけ、着ぶくれた不格好な少女時代を送りました。

健やかな従姉妹たちの中にあつて、アレルギー
体質はわがままな性格の子がなりやすいと囁かれ
ました。身体の冷えは、湯たんぽから電気毛布、
そして電気敷布へと温もりの恩恵を変えながら、
それでもどうか大人となりました。

「養生に志あらん人は心に常に主あるべし」
——この言葉にいたく心が触れたことがあります
た。医者まかせて薬にたよつて対処療法を行な
い、その場を凌いでも健康にはなれないことはわ
かっていました。親が守つてはくれないことも。

私の人生なのですから、私が主人公となって自身
の身体を積極的に健やかな方向に舵取りをしてい
かなくてはならないのです。でも一体、その健や
かさの方向はどこなのでしょう。

やがて漠然とですが、季節の方向性に舵を取る
ことではないかと思えてきました。今まで季節の
振り子についてゆけず、季節のリズムには調子つ

ばずれで、その時の気分の、気の強さだけで生活
にアクセントをつけてきたようなところがあ
ります。自然の打ち出すリズムに耳を澄ましたこと
がなかつたのですが、季節はひそかに秘密の音を立てて廻っているようです。

ある時、私に、スキーをしてみませんかと言
う人が現れました。そして何と、寒がり屋で、雪は
窓から眺めるものと思つていた私が、ゲレンデに
スキーをつけて立つという信じられないことが起
こつたのです。

猪谷六合雄（イガヤ・クニヲ 一八九〇—一九
八六）、この人物をもし知ることがなかつたな
ら、私はスキーに興味をおぼえなかつたかもしれ
ません。猪谷のスキーに生きた人生、猪谷の人と
なりに薫陶を受けたスキー・スクールの人々によつて、私は雪の世界に誘われたのです。

日本にスキーが伝えられたのは一九一一年、

オーストリアのレルヒ少佐によってでした。越後

の高田師団で彼は日本の若き将校たちにスキーを教えたのです。猪谷はその三年後に、栗の木で手製スキーを削り出し制作し、スキーの滑走にすでに挑戦しているのです。猪谷はスキーを知る前に挑戦しているのです。猪谷は雪山を歩き廻っていました。ところがある日、赤城山で二本のシュプールを見つけて何の跡か驚きました。二本の線の間が等間隔ならソリですが、そうではありません。不思議でならずその跡を付けていったところ、ある家の前にたどりつき、戸口に二本の長い板が立てかけられてあったといいます。猪谷とスキーの出会いでした。

日本では雪中歩行の用具としてスキーは発明されませんでした。輪かんじきが工夫され使われていたのです。朝鮮半島北部や樺太では、スキーが生み出されていますから、雪質の違いが輪かんじ

きとスキーを分けたのでしょう。

太宰治は『津軽』の冒頭において、「こな雪、つぶ雪、わた雪、みづ雪、かた雪、ざらめ雪、こほり雪」と、雪の名をあげています。このうち、水分の少ない、「こな雪」は、山里に降ることが少なく、水分が多い重い雪、その雪が凍ったものがほとんどだったと思われれます。雪玉、雪だるま、そして雪兔を作る重い雪の中を移動するのは、輪かんじきが適していました。スキーにとっては、こな雪こそが最適なのです。

『北越雪譜』を見ると、越後塩沢での子ども雪遊びが紹介されています。それは「雪ノ堂」という遊びで、今、秋田に残っているカマクラとそっくりな、雪で固めた洞に子どもが神をまつり、煮たきをして過ごすというものです。大雪の地方では、雪中を子どもが移動することは遊びとならず、城という聖域を築き、お籠りこもりをすること

が古くからの遊びであったわけです。

一九一一年から一九九一年と、昨年は日本にスキーが伝えられて八十年という記念すべき年でした。ワックスやスキー用具の改良、そして滑走技術の究明により、あらゆる雪質でのスキーが楽しめるようになりました。日本の野も山も川も、雪が降ることによって「雪わたり」という秘儀が可能となったのです。白銀の世界に隠された大地の凸凹を、足裏でなめらかに滑ることは、地球という天体の曲面を愛撫するような感動と興奮があります。冷え症の私は身も心も陽気になって熱を発し、雪の湿り気でノドもヒフも潤いを帯び、深く息づくことができます。雪の世界こそが、生命の蘇る原点のような気がしてくるのです。

猪谷六合雄は、季節は円運動を繰り返していると言います。冬は円の底であって季節の重心だということです。でも冬はいつまでも底に停止してば

かりません。やがて何かの力が湧き出して春へと上昇を開始します。

雪兔はシンとうずくまるだけではなく、雪原にいや天空にジャンプします。地球の重力を恩寵としたスキーの遊びは、八十年前の日本の子どもには聴くことのできなかつた冬の季節の音を、そっと知らせるのです。

(十文字学園女子短期大学)

